

三原市民と市長の「みらいトーク」(第 27 回) 実施結果

【日 時】 令和 5 年 8 月 30 日 (水) 18 時～19 時 30 分

【場 所】 会議室 801

【参加者】 三原市ひきこもり相談支援ステーション(2名), 若者活動スペースちゃんくす(1名), 広島ひきこもり相談支援ステーション(2名), ふくやま地域若者サポートステーション(2名, 内1名 Web)

(参加団体概要)

三原市ひきこもり相談支援ステーション
市の委託により令和5年4月からひきこもり支援開始。 6月にひきこもり相談支援ステーションを開設。 相談・訪問・居場所づくりや家族支援・啓発事業を実施している。対象者は概ね18歳から64歳まで。相談には精神保健福祉士と臨床心理士が対応している。
若者活動スペース ちゃんくす
市から複数の事業を受託し、ひきこもりや発達障害者の居場所や就労支援を中心に活動をしている。 不登校の相談や発達障害が懸念される人への訪問を含む、相談支援も独自に行っている。相談には作業療法士と相談支援員が対応している。
広島ひきこもり相談支援ステーション (東部センター)
県と広島市が一体となって運営している、ひきこもり相談支援センター3か所のうちの1か所。 東部センターはサテライトで週2回の開設。三原市のほか、尾道市・福山市・府中市・世羅町・神石高原町を管轄する。対象者は概ね18歳以上。相談には精神保健福祉士と公認心理師が対応している。
ふくやま地域若者サポートステーション
厚労省の委託事業として開設。その他 NPO 法人として、複数の国や県の委託事業や家族会・人材育成・就労支援等、制度の狭間を埋める独自事業を展開している。 主要事業は、就労等関連した面接相談、セミナー・ハローワークへの出張相談など。対象者は15歳から49歳。三原からも年間で数人の利用がある。

【内 容】

1. 直面している課題

- ・親子関係が支援方針に影響するため、家族支援は必須である。
- ・相談に結びつかない人への支援の検討が必要である。
- ・支援が長期化するため、支援者にもメンタル的なケアが必要である。

2. 支援の現状

(1) 家族の支援

- ・支援期間は長期化し、5～6年かかる事業もある。家族を孤立させないために家族支援が重要。
- ・「相談」に行く、「支援」を受けるということに抵抗を感じる人も少なくない。人の役に立つ作業をするために通う、という目的があると継続的に利用しやすい。
- ・居場所づくりはその人に合わせた機会を作ることが必要。社会との接点を持つ、きっかけづくりが大切である。

(2) 当事者に会おうきっかけ

- ・家族からの情報で本人の小さな変化に気づき、きっかけを探しながら支援している。
- ・本人の役割を家族と一緒に見つけることを続け、本人に実践してもらうことを繰り返すと、だんだんと相手が心を開いていくのを感じる事例もあった。家の中で本人の役割があり、自己肯定感が満たされる事が大事。

(3) 支援者のケア

- ・関係機関と共働及び役割分担をする。
- ・支援者間で課題を共有する。

3. 予防や社会の体制について

(1) ひきこもりの予防

- ・幼少期から集団生活・社会参加に困難さを抱える子どももいるため、発達特性を見極めた声かけや関わりが必要。
- ・家庭や学校以外の第3の居場所があるとよい。
- ・啓発活動は予防に効果的である。関心のある人だけでなく、関心の低い人にも情報が届くような取組が必要。
- ・登園支援が必要な事例もある。不登校支援のために、小さい頃から教育現場との連携が必要。

(2) 社会の体制

- ・教育現場や企業などとネットワークづくりができ、共に考えられる体制ができるとよい。
- ・雇用を希望する人を受け入れる企業の理解が必要。
- ・対応には1対1の丁寧な関わりが必要。社会参加の為の選択肢が複数あり、かつ、社会参加に向けて前進したり後退したりすることが受け入れられる社会の体制が構築されることが望ましい。

4. 全体を通して

- ・実務を経験して、助けを求めている人は多くいることを知った。家族のつどい等を開催して実際の支援につなげたい。
- ・サポートステーションのように就労について、身近に相談できる場所があるとよい。
- ・新規ケースは増加している。ひきこもりの背景は様々であるが、ひきこもりに至った要因を探りながら、どんな支援ができるか模索したい。
- ・義務教育終了後など、所属のない人の状況把握も課題で、保護者へのアプローチも大事。
- ・ひきこもりは「その人の持ち味をまだ発揮できていないだけ」という寛容な理解が社会全体に広がると良い。
- ・関心のない人にも情報が伝わり、理解が広まる事が大事。PTA講演会等での啓発も必要である。

【市長から】

このたびは大変貴重な意見交換ができた。

また引き続きこのように課題を関係者間で共有できるとよい。

今後、様々な形で連携とらせていただき、1人でも多くの方の支援につながり、笑顔になれるよう、バックアップしていきたい。